

退任教員紹介

2016年度をもって専任教員を退任された先生方から、ご挨拶をいただきましたのでご紹介します。



田代 泰久先生 Yasuhisa Tashiro

大学には17年お世話になり、着任3年目の2002年から研究科で起業関連の科目を担当しました。

私はかねて我が国の典型的な起業振興論に違和感を覚えていました。即ち、次代を拓くベンチャーを伸ばすには経済環境を整えることが重要なのに、起業振興を不況脱出の手段と捉え、しかも国柄の全く違う米国やその中でも突出した風土のシリコンバレーをモデルにすること等への違和感です。こうした考えでむやみに起業を煽れば無用の失敗の山を築きかねません。そこで、授業の導入部にはベンチャー大国、米国がいかに特殊で学び難い国か、衣食が足りたのち

需要不足で転落した日本経済に起業振興を始めとするサプライサイド政策は有効か等、起業への冷静さを喚起するような話題を据えました。その部分をだけ取り出せば反ベンチャー的に見えたかもしれません。

問題は、その後15年経ってもこの導入部が無用になっているとは思えない点です。勇ましいベンチャー論に限らず、もっともらしい通説や恰好のいいフレーズには少なからぬ見間違いもあってなかなか改まりません。

鵜呑みにせず自分の頭で考える。言うは易く行うは難しですけど、若い世代には、この姿勢を望みます。



宮下 篤志先生 Atsushi Miyashita

この冊子が発刊される頃は、現在のM1の方々にはM2に進学、そして新入の院生が入られ手に取っていることと思います。兼任講師の時代を含めて約10年の月日は、日本およびグローバルな環境が激変した時代であり、教鞭の内容も毎年変わりました。このような時にRBSで学ぶ意義は何処にあるのか?多様性と称して、独善的な考え方を勝手に強調する方法を学習することもできます。ホスピタリティと称して、自分の主張を通し相手が屈することで満足を得ることがあります。批判的思考と称して、他人を攻撃することもできます。

私は大人になってから学問をすることは「謙虚」に物事を探求することを身に付けることであると

思っています。この謙虚は決して情緒的なものではなく、学問によって自身の空間が拡がり、深い考えと共にコンテキストを探索できるようになります。やがて、単純な正解探しではなくなります。正解探して組織が持続できたら、これほどおめでたいことはありません。そんな時間があつたら、真理を探究することです。その先に「愛」というものを真に理解できることになると思います。厳しいビジネスの環境で戦うけれども愛は忘れない。このトレードオフが修了時に理解され、謙虚な自身として少しでも入口に立てることを期待しています。他人を叩いて大きくなるのではなく、自律して大きくなってください。ありがとうございました。



濱田 眞樹人先生 Makito Hamada

研究科の先生方、事務室の皆様、院生・修了生の皆様、5年間大変お世話になりました。御礼を申し上げます。

1980年に立教大学を卒業した私は、望んだわけではなく経理部に配属されました。簿記の資格を言われるままに取っても、日々、輸出ユーザンス金利の計算や外貨建て債権債務の処理には詳しくなるものの、月次で作成されるBSやPLに親近感はわきませんでした。しかし、自動車輸出の真っ盛りだったあの頃、自動車専用船保有会社の決算を任せられました。PCなど無い頃、電卓をたたいて、なんとか財務諸表を作り上げて、公認会計士監査を受けました。そうするうちに会計の

面白さに気が付いていたのです。その後は、数十年、会計の専門からは離れても、数字と格闘を続けてきました。

研究科では5年間、非財務系管理者・経営者のための会計の基礎として「会計学基礎」等を担当してきました。口々に「会計は苦手だ」や「普段全く関係ないの」と言う院生諸氏に、「数字を読む」「数字を感じる」「数字で語る」ことのビジネスパーソンとしての重要性を理解してもらおうと努力してきました。少しでも院生・修了生の皆様に影響を与えられたとすれば私の喜びです。